

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 5 日現在

機関番号：32616

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370093

研究課題名(和文) 考証学・言語の学、そして近代知性 - 近代的学問の「基体」として漢学の学問方法

研究課題名(英文) The Tokugawa Confucianism and the Modern Evidential Scholarship

研究代表者

竹村 英二 (Takemura, Eiji)

国土館大学・21世紀アジア学部・教授

研究者番号：80319889

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本科学研究では、(1) 18～19世紀日本の儒学世界において発展した実証主義的学問の解明、(2) その清代考証学との比較検討と日中間の学問特性の相違点の考察、(3) 日本考証学と西欧のフィロロギーとの比較研究が旨され、これらを、分野の異なる研究者との共同研究、海外の研究者との国際研究連携をもってすすめ、下記「研究成果」に列挙したごとの成果が産出された。

またその過程では、ヨーロッパ日本研究協会(EAJS、欧州最大の日本研究学会)を含めた主要な国際学会での研究発表、英ケンブリッジ大学に於ける国際研究集会の開催も実施され、これらを通じ、高い水準の日本思想史研究の海外への発信にも寄与した。

研究成果の概要(英文)：This research cluster has investigated the methodological peculiarities of the 'evidential Confucians' in Japan, and examined it in conjunction with their counterparts in China and the philologie of Germany in a similar period. The most notable methodological developments include the qualities of classical philology and historical chronology in the second-half of the Tokugawa period; such disciplines as grammar and usage, phonetics, prosody and lexicography also developed in the era. The Japanese evidential scholarship owed considerably to the increasingly influential Qing China scholarship, but the exports of Japanese scholarly achievements to China was also an important factor for the mutually beneficial scholarly development on both sides of East China Sea.

The mid-to-late Tokugawa scholarship was highly responsible for the development of the Bakumatsu 'evidential' scholarship that further helped develop 'modern' academic disciplines such as history in Meiji Japan.

研究分野：日本思想史

キーワード：日本思想史 比較思想史 儒学 考証学 フィロロギー 日本 清代 中国

1. 研究開始当初の背景

(1) 江戸後期～幕末の儒学・漢学、特にこの時期の考証学の研究手法的特質の解明を目指した研究は、本科学研究開始時点においても、そして現在に至っても乏しい。開始当初の時点では金谷治の大田錦城研究、波多野太郎による東條一堂『老子王注』研究、本研究代表者の一堂『論語知言』に関する論文があった他は蓄積が極めて少なく、その近代の学問方法との関連についても未開拓であった。翻っては素読/訓読の鍛錬と近代知性に関して前田愛、中村春作、斎藤希史らによる明治初期の日本語形成における漢語の役割、近代文学発展の基盤的素養としての漢文・漢文学の意義に着目する研究などがあったが、前述のような考証学の学問方法の内容の微細を検討し、その醸成する漢学の素養を考究する如くの研究は皆無であった。また、(2) 同時代の日本と中国の学术交流の様相も十分に考慮にいれながら清代考証学と比較検討し、日中間の学問特性の相違点を考察すること、さらに、それらと西欧のフィロロギーとの比較研究を行なう研究は研究開始当初には皆無であり、現在も本研究以外にはないと考えられる。とりわけこの第二点の考究を遂行するに必須であった日本思想史、中国学、西欧古典文献研究(乃至「フィロロギー」)の研究者同士の連携がまったくない状況であった。

2. 研究の目的

このような状況のもと、本科研では以下4軸の研究が目的とされ、研究が推進された。

(1) 幕末考証学の研究手法の特質の解明にむけた基盤研究、ならびに幕末漢学の発展に決定的な意味をもつ学問基盤を提供した18世紀の学問発展について。とくに18世紀前期の学問から同後期の考証学への継承・発展についての考察、日中の差異を明確に認識した上で書かれた儒書の研究を主題とした研究。

(2) 江戸後期考証学と清代考証学との関係性について。江戸後期の校勘学者、考証学者における学問発展は、清代考証学、とくに乾隆・嘉慶の考証学の達成と不可分である。幕末考証学の学問特性の特定、清代の考証学から継承したものの、異なる点の析出が目指された。

(3) 江戸後期考証学と西欧のフィロロギーとの比較考察。18世紀後半の日本では中国古典テキストの校勘・書誌の考究が質的・量的に盛んになるが、同時代に西欧でも古典研究が高度化・体系化されたのはA.Grafton、G.Pomata、N.Siraisiらの研究が物語る。本科研ではこれらの研究を参照しながらの日欧古典比較研究が目指された。

(4) 江戸後期考証学と明治前期学問との関係性について。とりわけ当時の文献学的・校勘学的研究水準を勘案した上での考証学の学問方法の内容の微細の検討、ならびにそれ

の醸成する漢学の素養を措定、その上で近代知性の問題を有機的、相互連関的に論じる研究。

3. 研究の方法

これらの目的達成のため本科研では、P.F.Kornicki(英ケンブリッジ大)、M.Collcutt(米プリンストン大)、大川真ら日本思想史研究者、伊東貴之(日文研)、B.A.Elman(米プリンストン大)、尾崎順一郎ら中国学研究者、江藤裕之(東北大)、A.Grafton(米プリンストン大)ら西欧古典学の専門研究者など国内・国外の第一級の研究者との研究連携を基盤に研究が推進され、その方法は下記のごとくであった。

(1) 18世紀初頭～19世紀中葉の日本儒者における古典テキスト研究の思想史的考察。18世紀初頭頃より、日本の儒学世界では高度な実証主義的、博物主義的、経験的学問の発展がみられ、さらに18世紀中葉ごろまでには古典籍研究の進展と相補的な発展をみた古代言語の文法、音韻の研究、字(辞)書学の発達が見られ、その後半には金石研究も進展した。本科研では、これらの研究手法の実践の具体像を明示すべく、中井履軒『七經離題畧』、「尚書」、山本北山『古文尚書勤王師』、久米邦武の『尚書』研究に顕現するところの研究手法の考察が試みられた。とくに中井、山本の二人は、両者ともに清儒の業績を十全に吸収したものであると同時に、独自性の高い旺盛な原典批判の姿勢もうかがわせるものであったことが研究で明らかにされた。19世紀の松崎慊堂、海保漁村、東條一堂らの考証学も、清学を大いに反映させながらも独自の視点を呈示するが、本研究ではこれら江戸後期～幕末儒者についての思想史的研究も為された。

(2) 江戸後期の校勘学者、考証学者における学問発展は、清代考証学、とくに乾隆・嘉慶の考証学の達成と不可分であり、これらと幕末考証学との関連、とくに後者が清代考証学から継承した点、逆に独自性が認められる点の析出は本プロジェクトの枢要であった。本科研では、濱口富士雄、近藤光男、小島毅らの研究、さらには伊東貴之の清代学問の網羅的研究などを出発点としながら、清代の専門研究者(伊東、尾崎)との共同研究をもってこれらの点の解明が目指された。

(3) 西欧における古典研究の発展の様相に関する研究、とりわけA.GraftonによるJoseph J. Scaliger, Isaac Casaubonの研究、G. Pomata, N. Siraisiらによる人文学的方法的発展に関する研究は、17～19世紀日本における原典批判の様相を照射し、客観的比較研究の俎上にのせる重要な手がかりを供与する。とくに、Graftonの研究に呈出される、「聖典」がいかんにして「考察対象化」、「客観化」され、これによりそれまでの修辞・文学を中心とする古典学が、いかに「探究」、客観的「調査」を主軸とする学問に発展したかの詳察、Pomata

らが解明した 16~18 世紀イタリアでの法学研究における文献批判の発展、医学における臨床的・解剖学的研究の発展がいかに歴史研究を含む人文学の研究「手法」を変容させたかについての研究は、日本儒者の原典批判の実相の比較対象として有用な知見を提供する。本科研ではこれらの研究成果を反映させながらの比較研究が試みられた。

(4)本科研で実践された共同研究の進め方についてであるが、本研究が当初から、学際性、国際性、研究地域(対象)の多様性が大きな特徴であったため、とくに初年度(2013 年度)においては、多彩な参加メンバーの専門領域に固有の学術情報の全体での共有、研究の方法的特質の相互理解の促進、さらには研究の全体的な方向性の確認のための国際会合が実施された。また、たとえば東アジアでの古代言語の理解方法と西欧中世における言語理解、言語研究の発展の様相についての緻密な相互理解の促進のためのより突っ込んだ討論機会として、まる一日同一主題について討論を重ねる分科会なども開催された。

4. 研究成果

上記「研究の目的」で示した 4 軸はすべて、分野の異なる研究者との国際的協働をもってはじめて可能となる性質の研究であったが、本科研では、国際研究連携をとりながら以下のごとく成果が産出された。

まず、江戸後期~幕末の考証学者の研究の実相を明らかにし、それをさらに比較思想史的研究として練り上げた成果として、代表者の単著『江戸後期儒者のフィロロギー：原典批判の諸相とその国際比較』を含める論文 6 本を挙げたい(詳細は下記「5. 主な発表論文等」参照)。さらには上記単著の主要論点を基盤に分野の異なる海外の研究者への英語での発信を意図して執筆された‘Confucian Origins of Modern Japanese Evidential Scholarship’(*Storia della Storiografia* 70-2 所収)も本年 6 月頃刊行予定である。研究分担者、研究協力者の諸業績についても下記「5. 主な発表論文等」を参照されたい。

また、これらの著書、論文執筆過程においては、ヨーロッパ日本研究協会(EAJS、欧州最大の日本研究学会)主宰国際学会への応募、採択があり、研究分担者伊東貴之、江藤裕之両教授を伴っての英語研究報告(‘Philological and exegetical studies of classical texts in 18th and 19th century Japan: A comparative approach’との演題での報告)が実施され、‘Confucian and other sources of evidential research in East Asia’とのテーマでのケンブリッジ大学に於ける国際研究集会も実施された(海外研究協力者である P.F. Kornicki 同大教授とともに研究代表者が主催)。同会では 18 世紀日・中の儒者における文献考証研究の方法的進展に関する発表、その近代日本の歴史学発展との関連についての発表(言語：日本語/英語)がなされた。

加え、本科研でははじめて言語学発展史、言語研究史等の知見の十全な取込みをもっての古典テキスト研究が試みられ、さらに、清代考据学の専門研究者との研究連携が江戸後期~幕末儒学の研究手法的特質の解明の重要な点であったが、これらについても上述の研究成果に反映されている。

特記したいのは、本研究で実施された日本思想史研究の国際的連携をもっての推進とその成果の海外への発信である。

上述の EAJS でのパネル報告ならびにケンブリッジ大での国際研究集会の実施のほか、おおよそ 2014 年 5 月頃より本格化した B.A. Elman プリンストン大学教授との研究連携は、当初から本科研で推進してきた国際的研究者ネットワーク拡幅を飛躍的に前進させた。同教授とは‘East Asian Philology in Comparative Perspective’と銘打っての研究プロジェクトを立ち上げ、そのスタートとして‘Princeton-Tokyo Philology Workshop’を開催することが計画され、Elman 教授の研究同僚である A. Grafton 教授、S. Pollock 教授(コロンビア大)、H. von Staden 教授(プリンストン高等研究院)、さらにはオックスフォード大学から Constanze Guthenke 准教授(西洋古典学)らも参加する国際的・学際的学術ネットワークの基盤が整備された。

加え、筆者も理事(Bureau Member)をつとめる国際歴史学と歴史理論学会(International Commission for History and Theory of Historiography)の Ewa Domanska 学会長(ポツナン大学准教授)、同会理事の Edoardo Tortarolo 教授(トリノ大学)らとの研究連携も 2014 年度に開始された。

これら海外の研究者との連携は、本科研の後半(2014 年末~)からの活動に有用な学術情報を齎したほか、とりわけ Grafton、Guthenke 両教授の豊饒な西欧古典研究の知見、Pollock 教授のサンスクリット文明圏における古典研究の比較文明史的知見、そして Tortarolo 教授の西欧史学の知識は、本科研を起点とする次期科研研究の方向性の策定に重要な意味をもつものである。

日本における日本思想史研究の文献学的、書誌学的、実証的水準は高い。しかし、高い研究水準、成果の効果的な海外への発信は未だ不十分であるなか、本科研の上述の学会発表、研究会実施、国際学術連携の開拓は、この是正にむけた一助であったと考える。また、質の高い外国人日本研究者との研究連携は、彼らのもつ広い比較史的・文明史的視野と知見の吸収、その過程で紡ぎだされる方法的特殊性などを日本人研究者が獲得するための希有な機会ともなり、この意味で、(a)研究「手法」の拡幅、(b)研究「対象」の多面化の両面における国際性の推進に多少なりとも寄与したと考える。以上の理由から、本科研は当初の計画を上回る進展をみせたと考える。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 28 件)

竹村 英二、'Confucian Origins of Modern Japanese Evidential Scholarship', *Storia della Storiografia 70-X 実際の刊行は2017年5月*。査読有

伊東 貴之、"Postwar Japanese Research on the History of Early Modern Chinese Thought", *ACTA ASIATICA: Bulletin of the Institute of Eastern Culture (Intellectual Trends in China and Korea from the Eleventh to Seventeenth Centuries)*, No. 112 (Published February 2017), 査読有(依頼原稿), pp.1~30. The Tōhō Gakkai (The Institute of Eastern Culture), Tokyo, February, 2017.

伊東 貴之、「清代考據學再考 以清代《尚書》學爲例」, 『明末清初學術思想史再探國際學術研討會 Revisiting Intellectual History of the Ming-Qing Transition 會議論文集』(共著), 台湾・中央研究院近代史研究所+中央研究院歷史語言研究所, 査読無(依頼原稿), 1~12頁, 2016年6月。

江藤 裕之、'Conceptual and Methodological Parallels of Kokugaku and Philologie', Craig, C., Fongaro, E., and Ozaki, A. (eds), *How to Learn?: Nippon/Japan as Object, Nippon/Japan as Method*, Milan: Mimesis International, 2017, 229-239. 査読無

⑤Kornicki, P.F., 'Speaking foreign languages in pre-modern Japan', *Asia-Japan Journal* (『アジア・日本研究センター紀要』 国土館大学 12 (2017年3月))

竹村 英二、「西欧・中国における文献研究の発展：十八世紀日本の比較対象として」(川口浩編『日本の経済思想 - 時間と空間の中で』ペリカン社、2016年2月) 査読無(依頼原稿)

竹村 英二、「江戸時代における漢学学問方法の発展 - 十八世紀を端緒とする書誌学・目録学、そして原典批判の伝統」(国立臺灣大學日本學研究叢書 21 『思想史から東アジアを語る』、2015年12月) 査読有

竹村 英二、「江戸後期の文献研究と原典批判」(伊東貴之編『心身と環境の哲学』(日文研伊東班共同研究成果論集、汲古書院、2016年3月) 査読無(依頼原稿)

竹村 英二〔共著論文〕、'Philological and exegetical studies of classical texts in 18th- and 19th-century Japan: A comparative approach' (『21世紀アジア学研究』第12号 2016年3月、国土館大学。伊東貴之、江藤裕之との共同執筆論文。言語：英語)。

伊東 貴之、「「心」と「身体」、「人間の本性」に関する試論 新儒教における哲学的概念の再検討を通じて」, 伊東貴之編『「心身/身心」と環境の哲学

東アジアの伝統思想を媒介に考える』, 汲古書院, 査読無, 327~352頁, 2016年3月。

伊東 貴之、'Essay on Mind, Body and Human Nature: Reconsidering the Philosophical Terminology of Neo-Confucianism', 『京都カンファレンス 2015「拡張した心を超えて：異邦の身体、人形、女の魂、東洋の精髓」予稿集』(*Proceedings of the Kyoto Conference 2015; "Beyond the Extended Mind: Different Bodies, Dolls, Female Soul and Eastern Spirit"*), 京都大学こころの未来研究センターこころ観プロジェクト(代表者・鎌田東二)+科学研究費補助金・基盤研究(A)「知のエコロジカル・ターン：人間の環境回復のための生態学的現象学」(研究代表者・河野哲也)+科学研究費補助金・基盤研究(B)「Embodied Human Scienceの構想と展開」(研究代表者・田中彰吾), 査読無(依頼原稿), pp.1~19, 2015年6月。

伊東貴之、「關於戦後日本の中国思想史研究趨勢变化之小考 主要以島田虔次和溝口雄三爲例」, 『綜合討論』, 復旦大学文史研究院 編(共著)『中国的日本認識・日本の中国認識』, 復旦大学専刊・中華書局, 査読無(依頼原稿), 46~56頁, 162~163頁, 2015年4月。

竹村 英二、「元~清の『尚書』研究と十八世紀日本儒者の『尚書』原典批判 - 中井履軒『七經離題畧(書)』, 同収「離題附言(書)」を題材に」(『東洋文化研究所紀要』 東京大学東洋文化研究所 第167冊 2015年3月) 査読有

竹村 英二、「日本儒学における考証学的伝統と原典批判 - G-B. ヴィーコ、A. ベエクらのフィロロギー、そして清代考証学との比較のなかで」(笠谷和比古編『徳川社会と日本の近代化 - 17~19世紀における日本の文化状況と国際環境』 日文研笠谷班共同研究成果論集、思文閣出版、2015年3月) 査読無(依頼原稿)

伊東 貴之、「清朝考証学の再考のために 中国・清代における『尚書』をめぐる文献批判とその位相、あるいは、伝統と近代、日本との比較の視点から」, 笠谷和比古編『徳川社会と日本の近代化 - 17~19世紀における日本の文化状況と国際環境』, 思文閣出版, 査読無(依頼原稿), 609-624頁, 2015年3月。

伊東 貴之、'Li Gong's Standpoint: Towards a Reconsideration of the Yan-Li School', *MEMOIRS OF THE RESEARCH DEPARTMENT OF THE TOYO BUNKO* (『東洋文庫・欧文紀要』), No.71, Published by The Toyo Bunko (公益財団法人・東洋文庫), 査読有, pp.1~43, 2014年6月。

江藤 裕之、「言語と文化の学としての国学とフィロロギー (西洋文献学) の知的平衡性」, *Journal of Japanese Language and Culture*, Japanese Department, Faculty of Liberal Arts,

Thammasat University, 2 (2014), 1: 7-25pp.(大学紀要) 査読有

竹村 英二、「日本の思想 / 思想史研究」(『リーディングス 21 世紀アジア』、国土館大学 21 世紀アジア学会編、成文堂、2014 年 3 月)。査読無(依頼原稿)

竹村 英二、「明治の知識層における漢学不可廃論の諸相 - 近代知性の基盤と漢学の学問方法」(上村敏文他編『日本の近代化とプロテスタンティズム』(教文館、2013 年 4 月)。査読無(依頼原稿)

伊東 貴之、「中国近世思想脈絡中所見の欲望：調和与共生」、中国社会科学院歴史研究所中国思想史研究室 主編『中國哲學』第二十六輯、中国社会科学出版社、査読無(依頼原稿)、pp.390 - 409、2013 年 8 月。

21.江藤 裕之、「フィロロギーとしての国学研究—村岡典嗣と芳賀矢一のフィロロギー理解と国学観」、東北大学国際文化研究科論集 21(2013 年): 57-69 頁(研究科紀要)。査読有

[学会発表](計 25 件)

竹村 英二、「考証学的手法の発展：その国際比較」(科研費研究「考証学・言語の学、そして近代知性」国際研究会合(於：東京大学東洋文化研究所、東京都文京区)、2017 年 3 月 15 日。

伊東 貴之、「An integrative study on the concept of self, body and mind : Beyond the dichotomy of East and West' (Organizer : Kono Tetsuya, with Tanaka Shogo and Thomas P. Kasulis) 第 3 1 回・国際心理学会 議 (ICP2016 ・ YOKOHAMA ; 31st International Congress of Psychology / 共催 : 日本心理学会 ・ 第 8 0 回大会), パシフィコ横浜 (神奈川県横浜市)(審査有), 2016 年 7 月 28 日。

伊東 貴之、「清代考據學再考 以清代《尚書》學爲例」、明末清初學術思想史再探國際學術研討 (Revisiting Intellectual History of the Ming-Qing Transition), 台湾・中央研究院近代史研究所 + 中央研究院歷史語言研究所 (台北市 台湾) (審査無・招待講演), 2016 年 6 月 24 日。

江藤 裕之、「Language Study and National Identity. *Kokugaku* of 18th-century Japan and *Philologie* of 19th-century Germany', Department of Foreign Languages and Linguistics at University of Malaya. December 9, 2016(クアラルンプール マレーシア)。(招待講演)

⑤江藤 裕之、「サピア、フンボルト、谷崎潤一郎 谷崎潤一郎の『文章読本』に見る linguistic relativism」、Thammasat University-Tohoku University Joint Symposium: 'International Symposium for Japanese Studies. September 24, 2016 (バンコク タイ)。(基調講演)

竹村 英二、「Confucian Origins of Japanese

Historiographical Methods', *International Conference: History and Historiography in the twentieth Century*, Organized by International Commission for the History and Theory of Historiography, held at the University of Athens (アテネギリシャ) 18-20 June, 2015(竹村報告は 6 月 20 日 (報告者病気のため佐藤正幸氏が報告原稿代読))。審査有

竹村 英二、「江戸中期の“市井の人”による中国古典テキスト研究—西欧の文献研究発展の様相と比較しながら—」(日本経済思想史学会第 26 回全国大会パネル報告「幕藩制転換期の経済思想」の第一報告 (報告者病気のため小室正紀氏が報告原稿代読)、於：金沢星陵大学 (石川県金沢市)、2015 年 6 月 13 日)。

伊東 貴之、「戦後日本の中国哲学・思想史研究における比較思想的な観点や視座について 問題提起を兼ねた概観」(依頼報告)、比較思想学会・東京例会、大正大学 (東京都豊島区)、2015 年 12 月 5 日。

伊東貴之、「Cataclysmic Disasters in Pre-modern East Asia (「前近代東アジアにおける天変地異 (特に地殻災害) について」)、第 22 回・国際歴史科学協議会大会、“JS4 : Historiography and Comparative perspectives on Natural Disasters (歴史学と自然災害の比較史) ”, in the 22th CISH (International Committee of Historical Sciences) Congress, 済南大学 (in Jinan, China), 審査有, 済南市 (中国)(2015 年 8 月 26 日。

江藤 裕之、「Conceptual and Methodological Parallels of *Kokugaku* and *Philology*. International symposium: How to learn - Nippon/Japan as object, Nippon/Japan as method. Joint symposium by Tohoku University and University of Florence. Palazzo Marucelli-Fenzi. (フィレンツェ イタリア)。October 30, 2015.

竹村 英二、「Philological and Exegetical Studies of Classical Texts in the 18th and 19th Century Japan: A Comparative Approach' (panel session9 の基調報告: 竹村がパネル代表)、The European Association for Japanese Studies

ヨーロッパ日本研究協会 第 14 次大会 (The 14th International Conference of EAJS) 大会報告, University of Ljubljana, Slovenia, 27-30, August, 2014): Section 8B (Intellectual History and Philosophy): Session 9。ならびに同 session 内単独報告: 'The Mid-to-late Tokugawa Philology and Empiricism 審査有 (リュブリアーナ スロベニア)。報告日は 2014 年 8 月 30 日。

竹村 英二、「Nakai Riken, Ota Kinjo and the evolution of evidential research in c.18th Japan' (東京大学東洋文化研究所個別課題「中国古代テキスト研究と西欧のフィロロギー --18 世紀日本の文献学的・書誌学的学問方法の比較研究 --」(於：国土館大学世田谷キャンパス 34 号館、東京都世田谷区)、2014 年 7 月 20 日

竹村 英二、「宋～元代の『尚書』研究と中井履軒『雕題畧』(書)、「雕題附言」- 18世紀日本・中国における『尚書』の考証学的研究に鑑みながら」(科研費研究「考証学・言語の学、そして近代知性」国際研究会合、於：東北大学国際文化研究科セミナー室、宮城県仙台市、2014年6月29日)

伊東貴之、「近代日本における中国学・東洋学の成立と展開」, 国立臺灣大學・日本研究中心, 第九次學術講論會, 招待講演(台北市 台湾), 2014年12月17日。

伊東貴之、「The Reassessment of the Qing Scholarship and the Bakumatu Empiricism」(上記ヨーロッパ日本研究協会第14次大会 Section 8B: Session 9 内単独報告)。審査有

江藤 裕之、「言語の学と「理解」の方法 - 「認識されたものを認識」する文献学の東西比較」(第21回公開講座「『知』の国際文化学 - 近世近代日本の学術と世界」, 東北大学大学院国際文化研究科公開講座「国際文化基礎講座」, 於：東北大学(宮城県仙台市) 2014年11月15日)。

江藤 裕之、「Intellectual Parallelism of “Koku-gaku” and “Philology”」(上記ヨーロッパ日本研究協会第14次大会 Section 8B: Session 9 内単独報告)。審査有

〔図書〕(計13件)

伊東貴之、〔共編著書〕『治乱のヒストリア - 華夷・正統・勢』〔シリーズ・キーワードで読む中国古典〕, 法政大学出版局, 2017年3月, 総252頁。

竹村 英二〔単著〕、『江戸後期儒者のフィロロギー - 原典批判の諸相とその国際比較』(思文閣出版、2016年3月)。

竹村 英二〔共著書〕, 辻本雅史・徐興編、国立臺灣大學日本學研究叢書21『思想史から東アジアを語る』, 国立臺灣大學, 台北, 2015年12月。竹村の論文: 「江戸時代における漢学学問方法の発展 - 十八世紀を端緒とする書誌学・目録学、そして原典批判の伝統」 査読有

伊東貴之〔共編著書〕、『「心身ノ身心」と環境の哲学 - 東アジアの伝統思想を媒介に考える』, 汲古書院, 総818頁, 2016年3月

⑤伊東貴之〔共著書〕, 中国社会科学院歴史研究所・一般財団法人 東方学会・渡邊義浩編(共著)『中国史の時代区分の現在 第6回日中学者中国古代史論壇論文集』, 汲古書院, 総466頁, 2015年8月。

竹村 英二〔共著書〕, 黒住眞、末木文美士他編、岩波講座『日本の思想』全8巻(岩波書店、2013年9月)第5巻。竹村の論文: 「古典を読む - 『葉隠』」。

竹村 英二 (Takemura Eiji)
国土館大学・21世紀アジア学部・教授
研究者番号: 80319889

(2)研究分担者
伊東 貴之 (Ito Takayuki)
国際日本文化研究センター・研究部・教授
研究者番号: 20251499

江藤 裕之 (Eto Hiroyuki)
東北大学・国際文化研究科・教授
研究者番号: 70420700

(3)連携研究者
なし

(4)研究協力者
Kornicki, Peter Francis (英ケンブリッジ大学)
Elman, Benjamin A. (米プリンストン大学)
Tortarolo, Edoardo (伊トリノ大学東ピエモンテ校)
Domanska, Ewa (ポーランド、ポツナン大学)
Guthenke, Constanze (英オックスフォード大学)
Grafton, Anthony (米プリンストン大学)
Pollock, Sheldon (米コロニア大学)
Collcutt, Martin C. (プリンストン大学)
Tanka, Brij Mohan (デリー大学、名誉教授)
佐藤 正幸 (Sato Masayuki、山梨大学、名誉教授)
大川 真 (Okawa Makoto、中央大学)
尾崎 順一郎 (Ozaki Jyunichiro 東北大学 院)

6. 研究組織 (1)研究代表者